イザベラ・バードと明治日本

槙　良生

1. はじめに

イザベラ・バード（1831～1904）はイギリスの女性旅行家、紀行作家。明治初期の東北地方や北海道、関西などを旅して、その旅行記“Unbeaten Tracks in Japan”（邦題『イザベラ・バードの日本紀行』または『日本奥地紀行』）を著した。1878 年（明治 11 年）6 月から 9 月にかけて、通訳兼従者として雇った伊藤鶴吉（いとうつるきち）を供とし、東京を起点に日光→新潟を経て、日本海側から北海道に至る北日本を旅した。また、10 月からは関西へ向かっている。この経験を行く先々で、郷里の妹ヘンリエッタ・バードへの手紙として綴り、これらを 1880 年 2 巻にまとめたものとされる。その 4 年後 1885 年、関西部分を省略した普及版（1 巻）が出版される。しかし、現在ではこの旅行は私的なものではなく、英国公使が立案した内地視察と考えられている。日本の旅の目的について、バードの研究家金坂清則（かなさかきよのり）氏によるとその著書『イザベラ・バードと日本の旅』の中で次のように著している。「西洋に由来するものを受け入れて変容しつつも、古来の日本に由来するものがなぜ残存するのか、その実態と理由を、それがよりよく残っていると考えられる「内地」を旅することによって記し、明らかにすることだったのです。調査研究の対象になる国であることがわかった」と。そしてこれはイザベラが自ら意図したわけではなく、英国の公使館のパークス卿がこれを計画し、すでに旅行家として著名になった彼女に依頼したものと考えられるのだと言う。いずれにしても外国人女性の視点を通して明治初期の日本の状況を知る大変貴重な資料である。

2. イザベラの来日と当時の状況

当時の政治状況を見て行くと、明治 6 年 : 廃藩置県、征韓論とこれに起因した政変、明治 7 年 : 佐賀の乱、明治 8 年 : 千島樺太交換条約調印、江華島事件、明治 9 年 : 萩・秋月・神風連の乱、と政情は穏やかではない。そして、バード来日の前年にあたる明治 10 年 2 月 15 日ついに西南戦争が勃発した。これは 9 月 24 日西郷隆盛の自決によって終結をみたが、翌年明治 11 年 5 月 14 日大久保利通（おおくぼとしみち）が暗殺されている（紀尾井坂の変）。まさにこの 1 週間後の 5 月 20 日に英国人女性イザベラ・バードが横浜に上陸した。維新の急速な改革に対する士族の不満がまだまだくすぶっており、大久保公暗殺の直後の不安定な時期であった。

イザベラは横浜上陸後、東京の英国公使館に入り旅行ルートを検討する。彼女の目的は、まだ西欧世界に知られていない本当の日本を見聞することであった。明治初期では、外国人は原則として、外国人居留地から 10 里（40km）四方に制限されていたが（外国人遊歩規定）、明治 8 年、明治政府と各国外交団との折衝により「内地旅行免

状」なるものが発行されるようになり、ようやく可能になりつつあった。さらに英国公使ハリー・パークスの尽力でイザベラは東京以北全地域の制限なしの通行証（ルートを特定せず）を入手することができたのである。また、交通手段として、人力車のほか、当時としては宿場ごとに有料で人馬を提供してくれる駅逓制度がようやく整いつつあり、これにより困難な旅も実行することができたのである。このほかにもヘボン、アーネスト・サトウ、ハインリッヒ・シーボルトなどの欧米人が多数協力した。また、内務省や外務省などの公の機関もまたこれを支援したのであった。

3. 日本人ガイド伊藤鶴吉のこと（◎は時岡敬子訳、日本紀行からの抜粋）

未踏路を行くからには、日本人ガイドが必要である。候補者の 4 人目としてやってきたのがこの伊藤鶴吉、なんと 18 歳である。47 歳と 18 歳、「親子コンビ」で旅は始まった。神奈川県三浦の出身で母子家庭だったようであるが、当時としては相当高い英語力を持っていたようで、それを駆使して奮闘する。彼の採用は実は以前から決まっていたとも言われる。その高い通訳力にとどまらず、宿場に行けば、宿や駅逓について価格も含めて交渉し、食事の手配や時には料理人にもなる。このような素晴らしい青年がいたということも驚きなのだが、彼に関する記録はあまりない。その後も通訳として活躍したようで亡くなった時には「通弁（つうべん）の元勲」などと称賛されたという。イザベラは最初、彼のことをあまり好まなかったが、次第に信頼をしてゆくようになる。そのあたりを見ていこう。

◎「伊藤の旅の巧みさと並はずれた知性には毎日驚かされます。“普通”の英語とは違う“いい”英語を話せるようになりたいというのが彼の望みで、新しい単語を正しく発音できるようになりたいと強く願っています」（第 14 信：日光藤原）

◎「伊藤は英語と日本語で日記をつけており、それには見聞きしたことがそれは細かく書いてあります。（中略）伊藤はどの地に行っても戸数を警察か駅逓係員に尋ね、また町では特産物を聞いて、それをわたしのために書き留めてくれます」（第 28 信：久保田）

◎「きょう大変残念に思いつつ、ついに伊藤と別れました。伊藤はわたしに忠実に仕えてくれ、一般的な話題の大半については、ほかのどの外国人からよりも伊藤からはずっと多くの情報が得られました。わたしはすでに彼を恋しく思っています」（第 48 信：函館）

4. 「日本紀行」にみる明治初期の日本（◎は時岡敬子訳、日本紀行からの抜粋）

彼女の冷静な目を通して、明治まもない東北・北海道の文化・習俗・自然等を 2 巻にわたって書き綴っているのだが、そのうちほんの一部を下記に紹介したいと思う。

◎「上陸してつぎにわたしが感心したのは、浮浪者がひとりもいないこと、そして通りで見かける小柄で、醜くて、親切そうで、しなびていて、がに股で、猫背で、

胸のへこんだ貧相な人々には、全員それぞれ気にかけるなんらかの自分の仕事というものがあったことです」（第 1 信：横浜）

◎「汽車は新橋駅に停まり、200 人の日本人乗客を 200 足の下駄の音とともに吐き出しました。この下駄の音はわたしのはじめて聞く音です」（第 3 信：江戸）

◎「魚と野菜を使った“日本食”はぞっとするほどひどいもので、食べられる人は少なく、それも長い間練習を積んだすえのことなのです」（第 6 信：江戸）

◎「旅行仕度は昨日で終わり、私の荷物は 110 ポンド（約 50kg）の重さとなりました。これに伊藤の荷物 90 ポンド（約 40kg）と合わせて平均的な日本の馬に載せられる量です。柳行李 2 個は紙で内張りがしてあり、防水カバーがついていて、荷馬の背に振り分け荷物にできて便利です。わたしは折畳椅子を持っていて－日本の家屋には床しか座るところがなく、寄りかかれる壁すらないのです－人力車用の空気枕、ゴム製浴槽、シーツ、毛布 1 枚、そしてなによりも大事な、軽い棒にキャンバス地を張った折り畳み式ベッド。これは 2 分で組み立てられ、高さが 2 フィート半（約 76cm）あるので、蚤除けになるでしょう」（第 9 信：粕壁）

◎「あなた（妹）に手紙を書こうとしましたが、蚤と蚊のせいでそれができませんでした。それにしょっちゅう襖が音もなく開き、何対かの細長くて黒い目が隙間からわたしをじろじろ見るのです」（第 9 信：粕壁）

◎「最近になって彼（金谷善一郎）は収入の助けにと、紹介状を携えた外国人に自宅の美しい部屋を開放しています。（中略）趣味がいいのでこの美しい自宅を洋風にするようなことは避けています」（第 10 信：日光金谷邸）

◎「入町はいまの私にとって日本の村の生活の縮図となってくれていますが、（中略）午前 7 時には太鼓が鳴り、子供たちを学校に集めます。校舎はイギリスならどの教育委員会をも辱めないものです。西洋化しすぎていると私は思いましたが、子供たちは現地式に床に座るのではなく、椅子に腰をかけて机に向かい、とても居心地が悪そうです。学校の設備は非常によく、壁には上等の地図が掛かっています。教師は 25 歳くらいの男性で、黒板を自在に使ってどんどん生徒に質問していました」（第 13 信：日光）

◎「これほど自分の子供たちをかわいがる人々を見たことはありません。（中略）また、他人の子供に対してもそれ相応にかわいがり、世話を焼きます」（第 13 信：日光）

◎「男性はなにも着ていないといえます。女性はほとんどが腰にぴったりと巻きつける短いペティコート（腰巻き）か、膝下はとてもぴったりしてそのうえはぶかぶかの青い木綿のズボン（もんぺ）、それに前がウエストまで開いていて、帯にたくし込んで着る青い木綿の上着と頭に巻きつけて縛る青木綿の手拭い以外、ほかのものは身につけていません」（第 14 信：藤原）

◎「5 時に伊藤が来て、頼むからもう出発してほしいと訴え、全然眠れませんでした。ここには何万匹もの蚤がいます！と愚痴をこぼしました」（第 14 信：藤原）

◎「農民の食料の多くは生か半生の塩漬けにした魚と、粗雑な漬物にして消化しにくくなった野菜で、（中略）すべてがあっという間におなかの中におさめられます。（中略）肌はまさになめし革のようです」（第 15 信：車峠）

◎「ヨーロッパの国の多くでは、またたぶんイギリスでもどこかの地方では、女性がたったひとりでよその国の服装をして旅すれば、危険な目に遭うとまではいかなくとも、無礼に扱われたり、侮辱されたり、値段をふっかけられたりするでしょう。でもここではただの一度として無作法な扱いを受けたことも、法外な値段をふっかけられたこともないのです」（第 16 信：車峠）

◎「米沢の平野は南に繁栄する米沢の町があり、北には湯治客の多い温泉の町、赤湯があって、申し分ないエデンの園で（中略）、自立した東洋のアルカディアです」（第 23 信：上山）

◎「裁判所では 20 人もの官吏がなにもしないでいるのを目にしました」（第 24 信：山形）

◎「（医学校を）退出する前、わたしはどんな答えが返ってくるかは承知の上で、宗教は教えているのですかと教頭に尋ねました。するとふたりの紳士はどちらも明らかに蔑みをこめた笑い声をあげました。『私たちは無宗教です。学識のある者ならみな宗教など、いんちきであることは知っていますよ』と教頭が言いました」（第 26 信：久保田）

◎「彼（伊藤）は外国人が発見したことを日本が利用するのは正しい、外国人が日本から学ぶこともいっぱいあるはずだ、日本は外国との競争に勝つ、なぜならいいものだけを取り入れてキリスト教のように厄介なものは取り入れないからと考えています」（第 28 信：久保田）

◎「わたしは学校のない地域では子供たちは教育を受けないままになっていると思っていましたが、それは間違いでした。小繋（こつなぎ）には、これまでわたしが休息を取ったほかのいくつかの村落もそうでしたが、主な住民が子供たちに勉強を教えてくれる若い男を確保し、ある者は衣服を、べつの者は住まいと食事を提供します。それより貧しい人々は月謝を支払い、最も貧しい人々は無料で子供たちに教育を受けさせられるのです。これはとてもよくある習慣のようです。小繋では、宿の主が教師に部屋と食事を提供しており、30 人の勉学熱心な子供たちが台所の一隅で授業を受けていました」（第 31 信：大館）

◎「ふたたび未開の地に入りました！ぽつんとある湖にまるで突き出すように建てられた二階の部屋の外にいま座っています。沈む夕陽を受けて、木立ちのあるところは赤紫色に染まり、陰になった部分はなおその陰を濃くしています。（中略）この夕べの小さからぬ魅力は、わたしがまったくのひとりだということです。伊藤もお供もなにもつけずに函館から 18 マイル（約 29km）馬に乗ってきて、鞍をはずし、礼儀正しくふるまうことと日本語の名刺を駆使することで、自分には良い

部屋とごはん、卵、黒豆の夕食を、そして馬には豆をすり潰した餌を確保できました」（第 40 信：北海道大沼）

◎「わたしが出会ったアイヌは、2、3 の例外を除いて、全員が非常にむごいことをやってのけそうなたくましい体つきで、なんとも猛々しい未開人の見かけをしていますが、しゃべりはじめるととたんにその顔はまるで女性のようにやさしい笑顔にかわります。そのさまは長く忘れられそうにありません」（第 42 信：平取）

5. 旅に生きた生涯（イザベラ・バードの旅の軌跡）

イザベラ・L・バードは 1831 年 10 月 31 日、イギリスのヨークシャー州バラブリッジの裕福な中流家庭の長女として生まれた。父エドワードは当初はインド・カルカッタで弁護士をしていたが、のちに牧師となる。母ドーラもまた、牧師の娘であり、生家も裕福な知識階級であった。父は早く息子を亡くしたこともあり、バードを男子のように育て、一人で馬に乗るようにさせたようだ。父が聖職者ということで、幼い時から転々と居住地をかえた。そのことでいろんな地域をみることができ、ほとんど大人の中で教育された。それでも肉体的には病気がちで、脊椎に持病を抱えていたらしく、病弱な前半生を過ごしていた。医師の薦めで 1854 年北米で転地療法したことがきっかけとなり、次第に旅に憧れるようになる。その後 72 歳（1904 年）まで世界各地へ旅行する。バードが訪れたところはロッキー山脈、サンドウィッチ諸島（ハワイ）、日本、マレー半島、カシミールとチベット、ペルシャ、韓国、中国、モロッコなどに及ぶ。世界各地の辺地旅行記の出版などの功績が認められ、1893 年英国地理学会の特別会員に選ばれたのである。

バード（1831～1904）が生きた時代はビクトリア朝と言われ、ビクトリア女王の在位（1837～1901 年）とほぼ重なる。この時代は英国においては産業革命による経済の発展が成熟に達した大英帝国の絶頂期であった。産業革命はすでに始まって年月を重ねていたが、工業化の進展は大衆社会を生み出しつつあった。ビクトリア女王は即位 3 年目に同い年のいとこ、ドイツのアルバート公と結婚する。謹厳な性格で、仲の良い夫婦となり、4 男 5 女をもうけたのである。一方、英国社会は中産階級が台頭してきたが、女性については社会進出が進む中でも、なお道徳的な生活をおくることを求めていた。バードもまたこのような文化的背景を踏まえて、こうした抑圧から解放されたい思いが、彼女に旅をさせたのかもしれない。バードが来日したころの英国は絶頂期にあったが、20 数年後の世紀の変わり目にはドイツや米国の台頭などにより、次第に相対的地位の低下は明白になっていた。女王は子供たちを欧州諸国の王族と婚姻させ、「ヨーロッパの祖母」と呼ばれるようになったが、同時に血友病（男性のみに発病し、出血した際に血が固まらない病気）の患者が多数出たことでも知られる。ビクトリア朝の絶頂期にあって、鬱陶しい社会から離れて好奇心で行動した女性旅行家の元祖だったのである。

6. イザベラ・バードの今日的意義とは

私はバードの業績について 3 つの意義を見出すのである。

① 「歴史の真実を世に知らしめた」こと

明治の初期は士族階級の不満による社会不安の時期と捉えがちだが、一般庶民はたくましく生きていた、と言う事実をバードは教えてくれている。また、諸外国に対しては富士山などに象徴されるイメージの日本について、生き生きしている本当の姿を紹介した。バードの旅行記には、政治・経済・文化・宗教・社会・生活など様々なテーマが描かれているのである。

② 「貧しくとも自立した」日本人の姿を再認識させたこと

バードは日本人についてかなり厳しくこきおろしているところも多いが、全体を通してみると高く評価している。貧しいけれども、決して卑屈でなく自立している。人々は勤勉で礼儀正しいこと。そして何よりも「信頼できる人たち」であることである。これは政治や外交にも相当影響があったのではないかと想像する。後に日英同盟というものが 1902 年結ばれるが、英国公使館の公式情報などとともに、日本国民が信用できるといったことが背景にあったように思われるのである。先の震災の時も、駅の階段に整然とならんでいるのを外国メディアが驚きと称賛をもって紹介していたことが思い出される。鎖国状態からようやく抜け出た明治初期と異なり、海外交流あたりまえの現代において、時代が変わっても良きＤＮＡを次世代に引き継いでいくこともまた大きな課題と言えよう。

③ 「エネルギーに満ち溢れた」明治の人を現代に紹介したこと

先に触れたが、秋田・大館のさらに田舎でも、若い男を用意して子供たちに教育をさせている。それは自分の子だけでなく貧富を問わずみんなを対象にしているのである。まだ、維新からたったの 10 年である。ガイドの伊藤もまた、一生懸命英語を学んで上を目指している。これまた、18 歳の青年にすぎないのである。これについて民俗学者の宮本常一氏はその著書『イザベラ・バードの日本奥地紀行を読む』の中で面白い指摘をしている「特に伊藤という通訳の青年の猛烈な勉強ぶりを、イザベラ・バードはいたるところで感心して書いているのですが、その後の日本の歴史のどこにも、伊藤のことは出てこない。ずいぶんいろんなことをしたのだろうと思うのですが、こういう人たちも一個の塵のように社会が飲み込んで巻き込んでいくほどに国全体の人たちが前向きに活動していた」。実際に彼は塵に埋もれることはなく「通訳の元勲」として活躍するのだが、彼のように上を目指して沢山の人が頑張っていたのは確かであろう。非常に冷静に愛情を持って生き生きした明治人の姿をみてくれたことは、大いに意義があったと思うのである。（以上）

（参考）「イザベラ・バードの日本紀行」の最終章の結び（抜粋）

≪イザベラ・バードの日本へのメッセージ≫

（中略）

すでにはじまった改革を実行すること、それらの改革を安定した軌道にのせること、新しい改革をきちんと開始させること、日本という土壌に移植できそうな西洋文明の果実を賢明に選ぶこと、そもそも日本には不適なために失敗した実験を思い切って放棄すること、平和外交政策を死守すること、本当の進歩とにせの進歩をうまく区別すること、過去 10 年間に国が実際に得たすべてのものをあくまで保持すること＿これらは今後長期にわたり日本で最優秀な人材の気力と知力を酷使するに充分である。この帝国がなしたとてつもない進歩はわたしたちの賞賛を求めて当然であり、国事を主導した人々の性格や彼らが 10 年間の体験で得た知恵と謹厳さから判断すると、わたしたちはすでにはじめられた改革の強化に期待してかまわないだろうし、今後行われる改革が全階級にとって益となるべく、また唯一永続的な成功に導きうる誠意と堅実さをもって真摯に行われると期待して当然であろう。

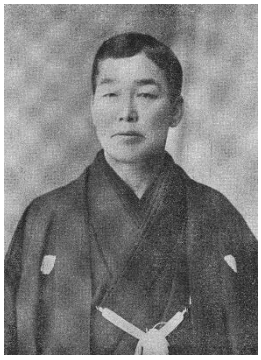
日本の水平線上にかかっている影のなかでもわたしの思索にとって最も暗い影は、日本が有史以来はじめて、キリスト教の果実をそれが育った木を移植することはなしに確保しようとしていることから生じている。国民は不道徳に溺れ、スタートを切ったレースにおいてオリエンタリズムという重荷が首にぶらさがり、その進歩は道徳的というより政治的、知識的である。言い換えれば、人の最も高尚な運命という点に関しては、現在のところ個々をとっても集団をとっても失敗である。日本にとっての大きな希望は、イエス・キリストが唇と命で説いた原始キリスト教の真理と純粋さを、わたしたちの芸術や科学をつかみとったときと同じように旺盛につかみうるということ、またキリスト教を受け入れれば、高潔さと国民の立派さという真の道義を備えた日本は、最も高尚な意味において、「日出ずる国」となり、東アジアの光明となりうるかもしれないということである。　　Ｉ．Ｌ．Ｂ

【参考文献】

「イザベラ・バードと日本の旅」（金坂清則著：平凡社新書）
「イザベラ・バードの日本紀行」（イザベラ・バード著、時岡敬子訳：講談社）
「日本奥地紀行」（イザベラ・バード著、高梨健吉訳：平凡社）
「イザベラ・バード」（パット・バー著、小野沢昌裕：講談社）
「イザベラ・バードの日本奥地紀行を歩く」（金沢正脩著：ＪＴＢパブリッシング）
「イザベラ・バードの日本奥地紀行を読む」（宮本常一著：平凡社）

この他、金谷ホテル歴史館、平取町立二風谷アイヌ文化博物館、ウポポイ、ウィキペディア等の資料を参考にした。写真は主にウイキペディアから引用したが、一部は筆者が撮影した。

資料 1:イザベラ・バード

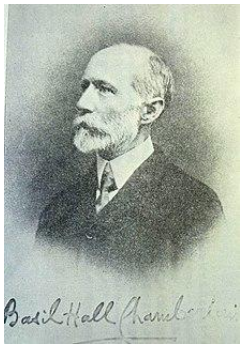


資料 2:伊藤鶴吉

資料 3:パークス

資料 4:ヘボン

資料 5:アーネスト・サトウ



資料 6:チェンバレン

資料 7:H・シーボルト

資料 8:マリーズ

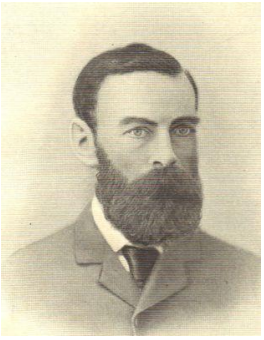
資料 9:寺島宗則

資料 10:黒田清隆

資料 11:金谷善一郎

資料 12:赤松連城

資料 13:新島襄と八重

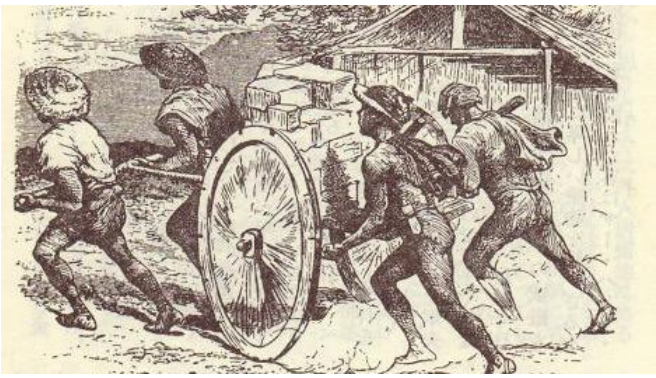


資料 14:デニング

資料 15:ビクトリア女王

資料 16:シドモア

資料 17:人力車



資料 18:屋台(下)

資料 19:山門(下)

資料 20:車夫

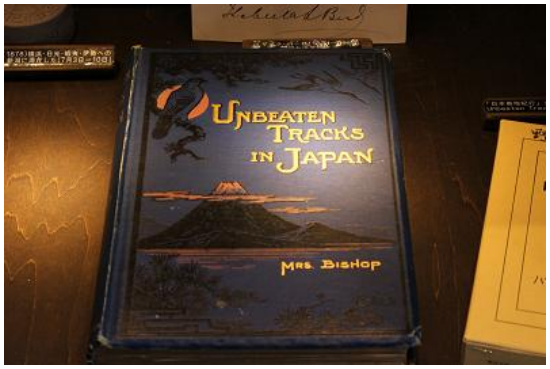
資料 21:アイヌの青年

資料 22:夏と冬の服装

資料 23:アイヌの家族

資料 24:金谷カッテージイン

資料 25:金谷ホテル歴史館



資料 26:『日本紀行』

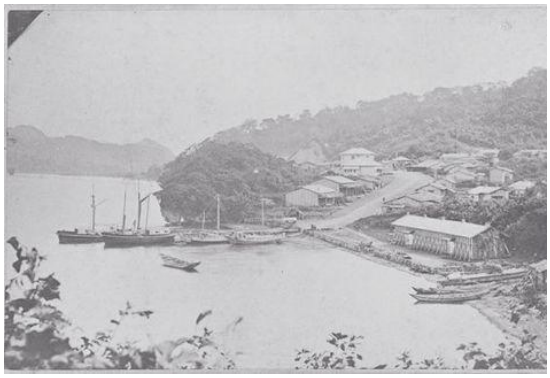
資料 27:新橋駅

資料 28:アイヌコタン

資料 29:函館

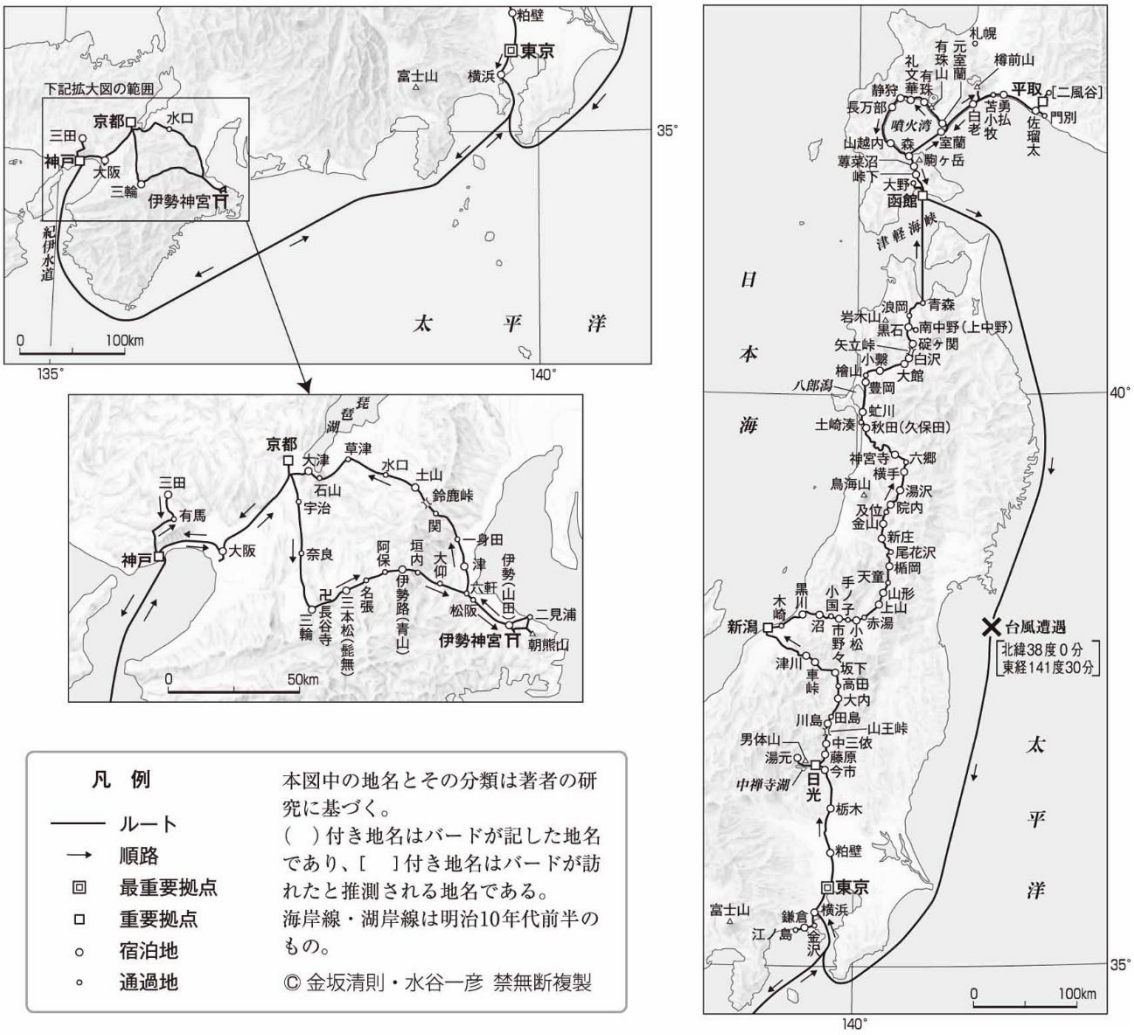
資料 30:宮崎旅館(ジュンサイ沼)

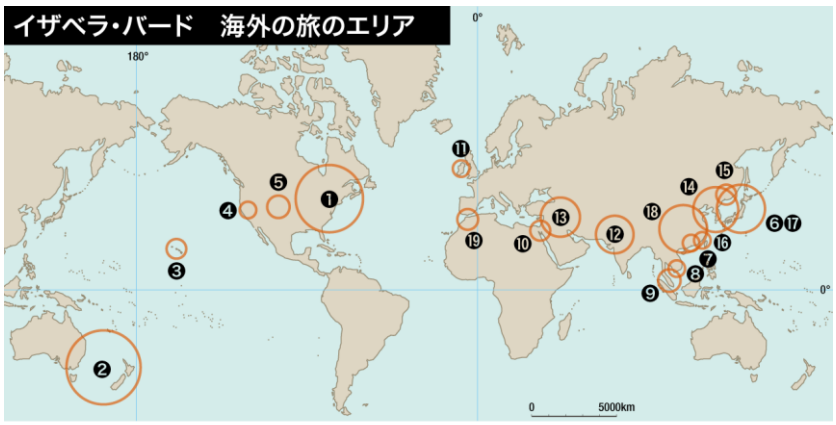
資料 31:大沼



資料 32:室蘭

資料 33:トッカリショ(絵鞆半島外洋)





❶カナダ・アメリカ東部
❷オーストラリア・ニュージーランド
❸サンドイッチ(ハワイ)諸島
❹タホ湖
❺ロッキー山脈
❻⓱日本
❼香港・広東
❽コーチシナ(サイゴン)
❾マレー半島・シンガポール
❿シナイ半島
⓫アイルランド
⓬パンジャブ・カシミール・小チベット
⓭ペルシャ・クルディスタン
⓮朝鮮半島
⓯沿海州
⓰中国南部
⓲揚子江流域
⓳モロッコ

金坂・水谷原図を簡略化

❶第1期、❷～❺第2期、❻～❿第3期、⓫～⓭第4期、⓮～⓲第5期、⓳第6期

nippon.com

上記の地図は金坂清則著『イザベラ・バードと日本の旅』から引用した

イザベラ・バードの経歴				
西暦	元号	年齢	出来事	参考
1831	天保2	0	英国ヨークシャーに生まれる	
1849	嘉永2	18	初めての旅行記が雑誌に載る	
1854	安政1	23	医師の薦めで米国、カナダを旅行	日米和親条約調印
1858	安政5	27	父エドワード死去、一家エジンバラに移る	日米修好通商条約調印
1866	慶応2	35	母ドーラ死去	薩長同盟締結
1867	慶応3	36		大政奉還
1868	明治1	37		明治維新
1872	明治5	41	オセアニアへ旅行、その後カリフォルニアへ	
1873	明治6	42	ハワイ、ロッキー山脈へ	明治6年の政変
1877	明治10	46		西南戦争
1878	明治11	47	4月英国出発	紀尾井坂の変
			5月21日日本上陸	竹橋事件
			6～9月東北、北海道を旅する	
			12月19日横浜から離日	
1879	明治12	48	マレー半島を旅する	琉球処分
1880	明治13	49	妹ヘンリエッタ死去、「日本奥地紀行」出版	
1881	明治14	50	ビショップ医師と結婚	明治14年の政変
1886	明治19	55	ビショップ医師死去	
1889	明治22	57	インド、カシミール、チベットを旅する	大日本帝国憲法発布
1890	明治23	58	ペルシャ、黒海、クルディスタンを旅する	
1892	明治25	61	英国王立地理学会に招へいされる	
1894	明治27	63	カナダ、日本を経由し、朝鮮、中国、ロシアへ	日清戦争
1895	明治28	64	1月朝鮮へ、夏は日本で、12月また朝鮮へ	下関条約、三国干渉
1896	明治29	65	揚子江、中国西部へ旅する、夏は日本で	
1900	明治33	69	12月モロッコへ	
1901	明治34	70	モロッコへ	
1904	明治37	72	10月7日誕生日を前に病没	日露戦争